

歴史を歩く 20

『戦国時代の群像』 第五話 新納氏と豊州島津氏との対立



島津実久・島津勝久と島津忠良・貴久親子との間で対立が始まった大永7年（1527年）には、既に大隅地域でも争乱の火蓋が切られていた。

大永3年（1523年）、飢肥・櫛間を領する豊州家島津忠朝と、高山の肝付兼興・志布志の新納忠武・忠勝との間で展開された串良城を巡っての争いは、一旦は島津忠朝が串良城を新納忠勝の子忠常に明け渡すことで和議を結んだ。しかし串良城主新納忠常の『城代』として、実質的に城主の代わりに城を治めたのは忠朝の一族である島津忠吉であった※。

年（1524年）のことである。この時、新納忠勝が島津忠吉を救援しなかつたことにより、新納氏と豊州島津家の対立は決定的なものになった。

新納氏は、かつて5代当主新納忠統の時代に、日向の伊東氏に備えるため、志布志城主から飢肥城主となったが、文明16年（1484年）の伊作久逸の反乱の後に行われた所領の配置換えによつて、再び志布志城主となり、飢肥と伊作久逸の治めていた櫛間は豊州家の島津忠廉が治めることとなった。ただし、飢肥の代償として、新たに末吉、財部、そして救仁郷の地を与えられたのである。『志布志町史』には、「豊州家島津忠廉と新納忠

続は飢肥の戦後を通じて最も心を許した間柄」と記しているが、新納忠統の甥にあたる7代目当主新納忠武、豊州家では島津忠廉の子忠朝の代になると、敵対関係になってしまったのである。

享禄元年（1528年）、島津忠朝、新納忠勝、禰寝院領主 禰寝清年、加治木郷領主 肝付兼演、野々美谷城の（都城市）城主 榊山幸久、相州島津家第2代 島津運久らは鹿児島清水城に集まり、島津実久・島津勝久と島津忠良との和解を図つたが、結果的に失敗に終わった。そして、それからしばらく後の天文3年（1534年）、ついに島津忠良・貴久は、島津実久・島津勝久に対して反撃を始めた。まず島津忠良・貴久が実久方についた日置南郷城主 桑波田景を攻め、陥落させた。そして、日置城主 山田有親

は、忠良に領地を献じて降伏した。そのような中、島津勝久は遊び事に興じて政務を怠り、さらに天文4年（1535年）、島津実久と仲違いになった。実久の攻撃により、勝久は鹿児島から追い出され、帖佐へと逃れた。

一方、大隅地域においても天文4年（1535年）8月、島津忠朝が都城領主 北郷忠相と共謀して新納忠勝の子忠茂の所領である末吉、松山、梅北に攻め入つた。ところが北郷忠相の背後をついて、日向の伊東義祐と、真幸院（現在のえびの市、小林市、高原町）を領していた北原兼守（肝付氏庶流）が北郷忠相の領内に攻め込んだため、結果的に新納氏は危機を脱した。

二は『大崎町史』で挙げているが、そもそも新納氏は志布志を拠点として、安楽、松山、大崎、梅北、財部、末吉、岩川、恒吉、市成、平房、そして高隈、垂水、廻牛根までを領しており、周辺の豪族にとつては、これ以上の新納氏の勢力拡大が脅威であつたに違いない。

【内村憲和】
※『歴史を歩く』⑱ 第三話 三州大乱の序曲』では新納忠常を『城代』としていたが、『城代』は、島津忠吉と考えた方がよいと思われる。



▲三州の大乱